

谷口恭の「梅田のGPがどうしても伝えたいこと」

[🔗 連載をフォロー](#)

BZは〇〇につながる地獄の門を開く

2021/03/31

谷口 恭 (太融寺町谷口医院)

[🏠 プライマリケア](#)| [🖨 印刷](#) |

0

過去のコラム「[ベンゾジアゼピン依存症、最強の“治療”とは？](#)」では、僕がタイの施設でボランティアをしていたときに米国人の医師Dr.Jから、「日本の医師は気軽にベンゾジアゼピン（以下BZ）を出し過ぎだ」と指摘された経験を述べた。BZが原因で起こった凄惨な事件についても触れ、さらに研修医時代に何人かの先輩医師たちが気軽にBZを処方していることに驚いたエピソードも紹介した。

研修医時代は僕がまだDr.Jに出会う前だったわけだが、実は研修医の頃から何人かの先輩医師たちのBZ処方に違和感を覚えていた。その理由は医学部入学前の学生時代の話にさかのぼる……。

僕が関西の私立大学に入学したのは1987年。その後の4年間及び就職してからの数年間は医学部受験などつゆほども考えず、バブル経済の恩恵にあずかったというわけではないが、世間の華やかさを感じながら、いつもワクワクすることを求めている。

そんな中、一時、居酒屋にブロンを持ち込んでトリップする遊びがはやったことがある。過去のコラム「[薬剤師への切なるお願い～かぜ薬編～](#)」でも紹介したように、僕自身は手を出さなかったが、好奇心の強い何人かの友人たちはブロンがやめられない状態、つまり依存症になってしまった。幸いなことに、僕の仲間の範囲では全員が社会復帰に成功したが、知り合いの知り合いあたりまでたどると「退学して入院しているらしい」というわさが流れる者もいた。

ブロンはあまりにも危険だということでその後成分が変わったと聞いたが、違法薬物などではなく、誰もが簡単に入手できるOTCだった。しかも簡単に大量購入できていたのだ。他方、当時も違法薬物に手を出す大学生は少なからずいた。大麻（マリファナやハンシユ）が最多だが、中には覚醒剤に手を染める大学生もいた。MDMAは僕がちょうど大

ムを求めて沖縄の離島に出かける者もいた。牛のふんにキノコが生えるらしい。ちなみに、麻薬（ヘロイン）、コカイン、LSDの話はほとんど聞いたことがない。

さて、代表的な危険ドラッグであるにもかかわらず、この手の話になるとあまり取り上げられない薬物がある。それがBZだ。僕が初めて名前を知ったBZはハルシオン。このBZが若者の間に“流行”した理由は幾つかある。もちろん睡眠作用を求めてではない。

僕の知る限り、当時最も若者の気を引いた理由は「幻覚が見える」だった。ハルシオンをアルコールと一緒に摂取しろそくの炎を見つめながら眠気に耐えているとやがて幻覚が現れる、というのだ。ハルシオンという名前の由来はhallucination（幻覚）からきているといううわさもまことしやかに流れていた（実際にはカワセミの一種の名前らしい）。さらに、記憶がなくなることを利用して「レイプドラッグ」に使われているといったうわさも絶えなかった。

「（闇の世界に詳しい）〇〇大学の（学生の）XXに言えば手に入る」などといううわさもあったが、精神科でない内科の診療所でもハルシオンが入手できるという話が出回り、「△△診療所なら簡単に処方してくれる」といううわさも聞くようになった。ちなみに僕は、好奇心は強い方だと思うのだが、薬物についてはすごくナーバスで、実は当時、悪友からハルシオンを見せられて「お前にも1錠あげるわ」と言われたことがあるのだが、怖くて断った。根性のないことが幸いすることもあるのだ……。

BZに気軽に手を出してはいけない理由として誰もが思いつくのは、副作用、依存性、事件・事故のリスクなどだろう。特に過去のコラムでも紹介したマイスリーによる「目黒区社長夫人わが子ごみ袋遺棄事件」はBZの恐ろしさを如実に物語っている（なお、マイスリーは正確にはBZではなく「Z薬」に分類されるが副作用も依存性もBZと類似しているので本稿では同じカテゴリーとする）。

聞き取り調査で見出したBZが開くハード・ドラッグへの入り口

今回は、あまり指摘されないけれども、BZに気軽に手を出してはいけない理由について述べたい。その理由とは「BZはハード・ドラッグの入り口になり得る」だ。

ハルシオン、デパス、エリミン（通称「赤玉」）といったBZに次第に依存していった当時の若者たちのいくらかは、その後、大麻や覚醒剤に手を出し始めた。覚醒剤にハマりだすと当然眠れなくなるから、睡眠薬としてのBZが必要になり量が増えていく。なお、警察の違法薬物の検挙者数を見ると、当時も今も覚醒剤の方が大麻よりもずっと多いが、実際の摂取者は大麻の方がはるかに多いのは間違いない。



僕の実感としては、少なく見積もっても大麻使用者は覚醒剤使用者の10倍以上はいる。（後述する）あるジャンキーによれば「大阪は世界一シャブが入手しやすい」そうだが、大麻はそのシャブよりもはるかに簡単に手に入る。大麻が覚醒剤よりもはるかに“敷居”が低いのは間違いない。

冒頭で述べたタイのエイズ施設に僕がいたとき、その施設にボランティアに来ていた日本人の男子大学生から「（僕に）会わせたい日本人がいる」と言われた。かつてタイはドラッグ王国と呼ばれていて、実際に違法薬物の注射針の使いまわしでHIVに感染した患者がその施設には大勢いた。その大学生とドラッグの話をしているときに「ジャンキーの日本人K氏と会えばきっと面白い話が聞ける」と言われたのだ。

結論から言えば、僕はそのK氏との出会いをきっかけに、タイで“沈没”している日本人のドラッグユーザー約20人にインタビューをすることができた。タイは旅行先としても人気があるが、物価の安さなどから長期滞在している日本人が少なくない。中でもヤワラーと呼ばれる中華街は“不良日本人”のたまり場ようになっていて、その頃の長期滞在者のほとんどは何かのドラッグに手をだしていると聞いた。興味深いことに、ドラッグに手を出さず沈没組には高学歴者も少なくない。元教師や一流企業の元社員もいたし、かつては大病院に勤務していたという薬剤師の資格を持つ男性や巨大製薬会社の元MRもいて驚いた。

そんな彼らの全員が常用していたのが大麻だ。大麻はタイでももちろん違法なのだが（現在タイでは一部の疾患に医療用大麻は合法化されているが当時は全て違法）、彼らによると大麻で捕まることはほとんどないらしい。覚醒剤の場合はそうはいかないが、タイでは「ヤーバー」（ヤーは「薬」、バーは「ばか」の意味）と呼ばれる純度の低いアンフェタミンの錠剤が1錠数百円で取引されていて、ユーザーはそれなりに多いようだ。

しかし、関東地方出身のK氏によると、「タイでヤーバーを仕入れるのはそれなりのリスクを伴う。世界一シャブを手に入れやすいのは何とんでも大阪だ。しかも純度の高いメタンフェタミンが手ごろな価格で手に入る」と言っていた。実際、K氏は大麻以外のドラッグとは手を切ったが、かつては重度の覚醒剤依存症で精神科病院に強制入院させられたこともあるという。タイに長期滞在しているのは大麻が入手しやすいからではなく、なんと「帰国すれば大阪に足が向いてしまうからだ」と言う……。

さて、興味深いのはここからだ。彼らにドラッグ摂取歴を聞いてみると、「きっかけはBZ」というケースが多いのだ。全体の約半数は「酒とたばこを除いたドラッグで最初に手を出したのはBZだ」と言う。しかも、先述したような幻覚を見るのが目的ではなく、睡眠薬や抗不安薬として合法的に入手、つまり医療機関で処方されたのがきっかけだというのだ。

僕はタイのエイズ施設で、米国のDr.Jから「簡単にBZを処方してはいけない」と教わった。その教えを今も忠実に守っているのはDr.Jの考えが正しいと思うからだが、タイで話を聞いた日本のドラッグユーザーたちの証言も理由の一つだ。

が、次第に返信が来なくなり、今では誰ひとり連絡がつかなくなっている。「〇〇が行方不明になった」とか「△△は薬物で死んだらしい」という話を何度か聞いた。最後までつながっていたK氏とも新型コロナウイルス感染症（COVID-19）流行前には既に連絡がとれなくなっていた。

1

0

著者プロフィール

たにぐち やすし氏●1991年関西学院大学社会学部卒。商社勤務を経て、2002年大阪市立大学医学部卒。研修医終了後、タイのエイズ施設でのボランティアを経て大阪市立大学医学部総合診療センター所属となり、現在も同大非常勤講師。2007年に大阪・梅田に開業。日本プライマリ・ケア連合学会指導医。労働衛生コンサルタント。



連載の紹介

谷口恭の「梅田のGPがどうしても伝えたいこと」

患者さんに最も近い立場で医療を行いたい……。それを実現するため医師6年目に資金300万円で開業した谷口氏。「どのような人でも、どのような症状でも受け入れる」をポリシーに過去11年で3万人以上の初診患者を診察した経験を基に、開業医のやりがいや苦勞、開業医に求められるミッションを若手医師向けに語ります。

[⊕ 連載をフォロー](#)

この記事へのコメント（0件）

[📧 コメントを書く](#)

コメントはまだありません

この連載のバックナンバー